

# ヒロシマが紡ぐ「地」と「知」の連帯

## －「国際平和文化都市」としての広島の実践－

藤高 リリ

(東京大学大学院総合文化研究科)

### 要約

本稿の目的は、「国際平和文化都市」として、全世界に平和を語る点におき重要な役割を担う広島の今後の展望や姿勢を再考することである。本稿は、おおよそ平和宣言の分析とリチャード・ローティの「solidarity (*rentai*)」の思想に基づき論じられている。本文は三章構成であり、一章では、66年分の平和宣言の基底にある「連帯」という考えについて、二章では、リチャード・ローティの「連帯」という思想について、三章では、「国際文化平和都市」としての広島の責任について論じている。

本稿での筆者の提案は、広島が今後「地」の連帯と同じように、「知」の連帯も強化していくべきであるというものである。すなわち、「ヒロシマの経験」から来る「われわれ」という感覚を、世界中の「(ひろしまの)友人」に広げることである。それにより「ヒロシマの歴史」は、「われわれの歴史」となり、広島はより強い連帯をより多くの人々、都市、国々と結ぶ事が出来るのである。

### はじめに

「無差別に罪もない多くの市民の命を奪い、人々の人生をも一変させ、また、終生に渡り心身を苛み続ける原爆は、非人道兵器の極みであり、『絶対悪』です。…(省略)…『絶対悪』である核兵器の廃絶と平和な世界の実現に向け力を尽くす事を誓い、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げます。」

これは、「あの日」から68年目を迎えた2013年8月6日の平和宣言の一節である。この日、松井一實広島市長は核兵器を「絶対悪」と強い口調で批難し、「日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現する地」、「人類の進むべき道を示す地」である「ヒロシマ」から核廃絶を世界に訴えた。

松井市長のこのことばからも分かるように、広島は「平和」において、日本と世界、人類を代表する「地」<sup>i</sup>としての特殊な領土性をもつ。広島は日本のヒロシマであるだけでなく、世界の[H]iroshimaでもある。

しかし、筆者はこうした「ヒロシマ」の「地」ではなく、思想としての「知」を本稿で論

じたいと思う。これを論じるにあたり、筆者はこれまでの66年分の平和宣言を分析し、その基底にある「連帯:solidarity」という考え方に着目した。<sup>ii</sup>本稿では、アメリカの哲学者であるリチャード・ローティ（Richard Rorty）<sup>iii</sup>の「連帯」の思想を参考にし、「平和」からかけ離れた状況にある今日の世界において、国際平和文化都市広島が歩むべき道を思索した。

その前にまず、「広島」ということばの整理をしておかねばならないだろう。「ヒロシマ独立論」の著者である東によれば、「広島」という都市には4つの顔がある。一つ目は呉や宇品に代表される軍都としての「廣島」、二つ目は、原子爆弾の投下、破壊、復興というプロセスを辿り「国際文化都市」という世界的シンボルの役割を背負わされた都市としての「ヒロシマ」、三つ目が、運動家や留学生、観光客などの「生者である他者」が行き交う今現在のまちの「広島」、四つ目が、まだ生きていて、「明確な友愛の念」をもって友と自らを脅かす暴力に対して「声:非合意」をあげることができる都市としての「ひろしま」である（東:2007）。本稿では、東の理解に基づいてことばを選び「広島と平和」を論じていきたい。

では最初に、これまでの平和宣言の中で「連帯」がどのように論じられ、広島で形作られてきたのかを以下、時代を追って見ていくこととしよう。

## I. 「平和宣言」から見る「連帯」

平和宣言で初めて「連帯」という語が用いられたのは、1959年のことであった。当時の浜井信三市長は、「人類連帯の精神に立って、すべての民族、すべての国家が小異をすてて大同につき、一切の戦争を排除し、原水爆の全面禁止を成し遂げなければならない」と述べている。その後も、60年、61年、62年と立て続けに「連帯」という言葉が浜井によって用いられ、広島市長が浜井から山田節夫となった67年の平和宣言の中でも「連帯」の思想は受け継がれている。これらからも、平和宣言での初期の「連帯」は、国家主権や、異なる制度を持つ社会体制、民族や人種を超えた、主に「世界市民」、「運命共同体」、「地球人」という意味合いを持つ、いわゆる「人類連帯」を意味していたことが読み取れる。

しかしその後、この「人類連帯」は、当時の冷戦という国際事情を反映しより具現化された「地」の連帯、すなわち「都市連帯」という形で発展していく。この考えの萌芽がみられたのは1975年の平和宣言であり、広島市の最初のパートナーとなったのが、同じく原子爆弾による甚大な被害を被った長崎市である。当時、広島市長であった荒木武は、「ヒロシマの抗議を無視して、核実験を続行し、さらに強力な開発を進めており、それに追隨して核武装を指向する国」に対して、「広島市は同じ被爆都市長崎市と相たずさえ、真の世界平和を樹立する決意を新たにし、我々の平和理念が、全人類の共鳴を得るよう切望する」と述べた（強調引用者）。翌年の76年には、広島市長と長崎市長が共に国際連合を訪問し、核軍拡に血眼となり我々を忘却しつつある当時の世界に対して、同じ「生き証人」として、悲惨な被爆体験の事実、そして核兵器廃絶を強く訴えた。

その後、広島市と長崎市による精力的な活動は更に勢いを見せ始める。1978年の国連軍縮特別総会への列席、さらに1982年の2回目の国連軍縮特別総会では、荒木武広島市長が、「世界の都市が国境を越えて連帯し、ともに核兵器廃絶への道を切り拓こうと、『核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画』を提唱した。翌年には広島市と長崎市の連名でそれが呼びかけられ、それは後に、23カ国100都市が参加する1983年の第一回世界平和連帯都市市長会議の開催へと結実する。この会議は2013年に「平和首長会議」とその名を変え、2014年現在、158カ国の国や地域における6127もの加盟都市を抱える国連経済社会理事会のNGOとなっている。

以上を見ても分かるように、平和宣言からみる広島の「連帯」は、当初の「人類連帯」からより実効性を持ち具現化された「都市連帯」へと緩やかに繋がり、形作られたことが伺える。たった2つの都市の連携が、今や6127もの都市〔地〕の連帯となり、核兵器廃絶というヒロシマ、ナガサキの理念を世界各地に広めたことは、広島市と長崎市が協働して押し進めた「都市連帯」の大いなる成果とでもいうべき点であろう。では次に、思想的営みとしての「知」の連帯の重要性とそれがもつ可能性を、ローティ어의連帯の思想から考え、論じていきたい。

## II. リチャード・ローティ어의「連帯」の思想

ローティ어(2000:401)は「偶然性・アイロニー・連帯」の中で、連帯(solidarity)とは「伝統的な差異(種族、宗教、人種、習慣、その他の違い)を、苦痛や辱めという点での類似性と比較するならばさほど重要ではないと次第に考えていく能力、私たちとはかなり違った人びとを『われわれ』の範囲のなかに包含されるものと考えていく能力」という。そしてシュクラの定義を借り「残酷さこそ私たちがなしうる最悪のことだと考える人々(ローティ어2000:5)」を「リベラル」と定義し、自らが提唱する「リベラル・ユートピアの可能性」について以下のように述べる。

「私のいうユートピアにおいては、人間の連帯は…(省略)…達成されるべき一つの目標だ、とみなされることになる。この目標は探求によってではなく、想像力によって、達成されるべきなのである。連帯は反省によって発見されるのではなく、創造されるのだ。私たちが、僻遠の他者の苦痛や屈辱に対して、その詳細な細部にまで自らの感性を拡張する事によって、連帯は創造される。感性をこうして拮げることにより、自分と異なった人々に対して『彼らはわれわれのようには感じていない』とか、『苦しみなんてつねにあるものなのだから、彼らに苦しみを与えたらいいではないか』と考えて、私たちがそのような人々を疎外することが、いっそう困難になるのだ(強調筆者2000:7)」。

「連帯」が人間存在にとって普遍的、本質的なものではなく、創造されるものであると考えるローティアーは、「もしあなたがアウシュヴィッツへと列車が通じている時代のユダヤ人だったとすれば、非ユダヤ系の隣人に匿ってもらえる見込みは、ベルギーではなくデンマークかイタリアに住んでいる場合の方が高い（ローティアー2000:395）」という事例からそれを説明する。ローティアーによれば、デンマーク人やイタリア人がリスクを伴いながらユダヤ人を匿ったのは、ユダヤ人がカント的な見方である「理性を持つ人間」であるからではなく、われわれと「同じミラノ人仲間である」、「同じユトランド人仲間である」、といった「われわれと同じ仲間」であったからと述べる。そしてベルギー人にそれが出来なかったのは、「非人間性」や「無慈悲な心」、「人間の連帯の感覚の欠如」が理由であったのではなく、ユダヤ人を「われわれ（仲間）」と見なすことができなかつたからだという。これについてローティアーは以下のように「連帯」の性質を説明する。

「私たちの連帯の感覚が最も強くなるのは、連帯がその人たちに向けて表明される人びとが『われわれの一員』と考えられるときである、ということである。この場合の『われわれ』は、人類よりも小さく、それよりもローカルなものを意味する（ローティアー2000:399）」

ローティアーは、リベラル・ユートピアの可能性として、ネガティブなエスノセントリズム（自文化中心主義）としての「われわれ」ではなく、より広範な範囲に及ぶポジティブな「われわれ（われらリベラルたち）」のエスノセントリズムとしての「連帯」を思い描く。ローティアーによれば、ローカルな「われわれ」の意識をよりグローバルな文脈における「われわれ」とするには、「まず隣の洞穴に住む家族に拡がり、ついでに川向こうの部族に、さらに山を越えた部族連合に、海を隔てた信仰を持たない者たちに拡がってきたという出来事の連鎖（ローティアー2000:407）」を継続すべきであるという。その際に重要となるのが「エスノグラフィ、ジャーナリストによるレポート、漫画、ドキュメンタリー、ドラマ、そしてとくに小説と言ったジャンル（ローティアー2000:7）」から、われわれが他者の詳細な生を「物語」として捉えることである。それにより、われわれがより遠くの人々の残酷さや苦痛に対する「共感」を持つこと、そしてその残酷さや苦痛を軽減させようと「連帯」することが可能になるという。これがローティアーのいうリベラル・ユートピアの「連帯」の可能性である。

### Ⅲ. 「ヒロシマ」が紡ぐ「地」と「知」の連帯

#### —国際文化平和都市としての広島の実践—

最後に、平和宣言から見た広島「地」の連帯、さらにローティアーの「連帯」の思想を参考にして、ヒロシマが紡ぐ「知」の連帯の可能性について論じる。

その前にまず「知」について簡潔に述べたい。広辞苑によると「知」とは、(1)しること、しらせること。(2)よくしること、したしくすること、しりあい。(3)さとること。である。これらを漢字で表すと、(1)知覚、感知、認知、報知 (2)熟知、知音、知人 (3)知恵、知性、英知等で表記される。よって本稿で用いる「知」は、これらを包括的に含むものである。

これらを踏まえた本稿の結論は次の通りである。広島は今後、「ヒロシマ」の経験に基づく「地」の連帯と同じように、苦痛や屈辱をうけている他者に対し、「ヒロシマ」の経験からくる感受性を研ぎ澄ますという、「知」の連帯を強めていかねばならない。それは、例えば「唯一の被爆国」の中に同一化され得ない 20 カ国にも及ぶとされる外国人被爆者たち、「Atom for Peace」の下に推進されてきた日本の原子力発電所を動かす核燃料のおおよその部分をウラン鉱山にて採掘してきたアフリカの子どもたち、その原子力発電所の事故によって故郷を追われた福島の人びと、「Nuclear shadow 核の陰 (Kazishi:2010)」とも言われる劣化ウラン弾の影響を受け母親の胎内ですでに被爆した胎児など、ヒロシマの「ヒバクシャ」だけでなく、国内外のこうした全ての「hibakushas」<sup>iv</sup>に対してである。東のことばを借りれば、これは次のように言い表される。

「私たちは広島にありながら、無数のヒロシマに呼びかける。Hiroshima ではなく、hiroshimas とことばにしてみるのだ。世界中のあらゆる「ヒロシマ」的な状況に置かれた人々の声に耳を澄ますことを私たちは目指す。都市のなかの貧困や不正。自国の、あるいは異国の軍事にさらされる島々。あらゆる『ひろしまの子』たちの叫びに耳を澄まし、また、呼びかける。」 (強調筆者 2007:210-211)

「あの日」から 69 年を迎えた今、広島はその特殊な「ヒロシマ」の経験を世界に発信するだけではもはや不十分である。平和を語る上でどの都市よりも強い影響力を持ち、それが認められている広島であるからこそ、広島には「Respons-abilité:責任」がある。すなわち広島は、世界各地に散在する苦痛と辱めを受ける、東の言う「ひろしまの子」、世界の「hibakushas」の声を聞きそれに応えるという「応答可能性」としての「責任」を持つ。<sup>v</sup>

これまで語られてこなかった、現れてこなかったわれわれの友の声をきくことが、「ヒロシマの物語」を「われわれの物語」とし、個人・都市・国家をまたいだグローバルな「知の連帯」を、ここ「ヒロシマ」から生み出す。互いをよく知り、知り合いとなる。その暁には「われわれ」を脅かす暴力に対し声をあげることができる、知らせることができる都市としての「ひろしま」となるのである。それは「ヒロシマ」が紡いだ「地」と「知」の連帯都市であり、国際平和文化都市としての責任を担う広島が歩むべき道であり、未来なのである。

## ■参考文献

東琢磨、2007、「ヒロシマ独立論」、青土社

大賀祐樹、2009、「リチャード・ローティアー リベラル・アイロニストの思想 1931-2007」、藤原書店

鶴田格、藤岡悠一郎、坂井真紀子、2012、「アフリカにおけるウラン鉱山発掘」、アフリカ研究 80:27-32

リチャード・ローティアー、2000、「偶然性・アイロニー・連帯 リベラル・ユートピアの可能性」、岩波書店、斎藤純一・山岡龍一・大川正彦 訳

Kazashi Nobuo, 2010, “DU(Depleted Uranium)Weapons as the Nuclear Shadow: Iraq war as seen from Hiroshima “, Carol RINNERT, Omar FAROUK, INOUE Yasuhiro,(eds) , *HIROSHIMA & PEACE* , Hiroshima, keisuisha, pp.230-244

## ■参考 Web サイト

広島市公式 Web サイト

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/genre/00000000000000/1111135185460/index.html>

---

<sup>i</sup> 「地」とは、広辞苑(2008:1783)によると(1)つち、りく。(2)ところ、場所。(3)領土、なわばり。本稿ではこれらの意味で「地」を用いる。

<sup>ii</sup> 平和宣言がなされなかった 1950 年を除く、1947 年～2013 年までの 66 年分の平和宣言。

<sup>iii</sup> Richard Rorty(1931-2007)は、近代アメリカを代表する哲学者。本論で取り上げたローティアーの著書「偶然性・アイロニー・連帯 リベラル・ユートピアの可能性」は、これまでの大陸系の哲学と分析哲学の言語論を統合させ、これまでの「哲学」そのものを批判的に見つめ直したローティアーの代表作。

<sup>iv</sup> 世界に散在する未だ見えない多くの被爆者を表す為に、hibakusha[s]と表記した。

<sup>v</sup> この考えは、エマニュエル・レヴィナス、ジャック・デリダの「Respons-abilité:応答可能性:責任」の考え方に依拠している。二人は「責任:Responsibility」の意味をよりの確に捉える為、語源であるフランス語の「Responsabilité」からそれを考える。それは、他者が私に先立って私に呼びかけており、私はそれへの「諾否」の応答をする前に「聞き取る」ことですでに他者に応答してしまっている限りにおき、他者に対して「責め」、すなわち「責任」があり、それは「他者への応答」であるという「応答可能性:責任」の考えである。